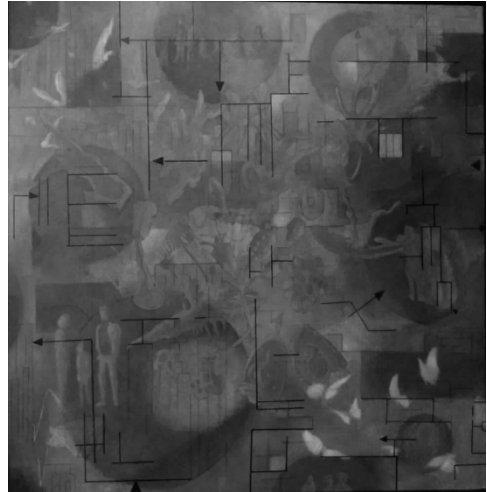


千葉喜彦「ホメオスタシス」(1167 mm x 1167 mm, 2017年) 表表紙

「概リズムは周期的な環境変動に対する積極的な適応で、ホメオスタシスは消極的適応である」と、時間生物学初期をリードしたJürgen Aschoff教授がどこかで言っていた。たぶん、彼が1964年ヨーロッパで組織した国際シンポジウムの講演要旨集で、だったと思う。積極的か消極的かはともかくとして、両者が環境の時間変動に対する適応機能であることは間違いない。因みにホメオスタシスはアートを語る言葉としても使われている (Crary J. 2001 Suspensions of Perception. The MIT Press; 岡田温司監訳 2005 知覚の宙刷り。平凡社)



千葉喜彦「リズム」(545 mm x 395 mm, 2016年) 裏表紙

生命現象には周期的なものも多く、古くからいろいろな分野で扱われてきたが、環境サイクルに似た周期のもの(circa-rhythm)が本格的に研究され始めたのは、1950年代のことだ。以来、研究は個体から分子レベルにいたるまで飛躍的に発展してきた。ここに来て思うのは、生態学的立場からの研究、すなわち自然集団の研究がどれほどなされてきたのだろうか、ということである。例えば、個体群の概日波形は個体の波形の単なる集合で説明できるものなのだろうか。また、群集構造の形成に、個体群の概日性がどのような役割を演じるのかなど、生態学的課題は多いように思われる。20年以上も研究現場を離れていた者の杞憂に過ぎなければいいが。

